

Studying the Masculinity - Femininity Dimension in Personali

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/47691

パーソナリティーに於ける男女性の次元の検討*

多 田 建 治

問 題

男性性、女性性の概念は、多くの人格検査の中で、その尺度の一つとして用いられている。又、性度そのものを測る心理検査も多少見られる。例えば、尺度としては、MMPIのMf尺度、Guilford-MartinによるGAMINのM尺度、CPIのFe尺度等があり、性度検査としては、Terman & Milesのものや、Strongのもの、Frankのもの、松岡と小保内による色彩象徴テスト等がある。

心理検査による、男性性、女性性の結果は、個人的には、職業相談、結婚相談、性的異常者の発見、診断等に有効であり、社会的には、ある集団の男性化、女性化の現象を数量的に把握し、相対的に評価出来るし、又、ある時代、地域、職業のもつ集団的性格を明らかにすることが出来る。(小林さえ編、1973)さらに、臨床的観点からみれば、自我の確立の問題や、Jungのアニマ、アニムスの統合の問題として、人格発達や人格形成の上で、男性性、女性性の概念は重要な意味をもっている。又、人間関係、グルーピング、ソシオメトリー等を考える場合には、これらの概念はもっと考慮されてしかるべきものであると思う。

男性性格、女性性格の起源は、一次的には、男女の生物学的な差異、即ち、直接には、性染色体に基づく遺伝子の違いによる、性ホルモンの分泌の差異、身体の大きさ、骨格や筋肉の違い、脳の大きさの違い等、身体の構造、機能の差異が性的性格の形成条件として考えられる。二次的には、社会、文化的要因として、幼時期に於けるモデルへの同一視や、幼時期に準拠す

る集団の影響等が、その形成条件として考えられる。そして、この社会、文化的要因の重要性については、Mead M. (1949)の調査報告の中で、ある未開社会に於ては、親の養育態度や、準拠する集団への同一視という二次的要因により、欧米の社会とは、男女性が全く逆になった、チャンブリ族、男女共に男性的な、ムンドグモール族、男女共に女性的な、アラベシ族等の例があげられている。そして、又、この様な例は、実を云えば、縮小された形で、我々の文化の中(欧米や日本)に多くみることが出来るのではないかと思われる。我々の文化の中で、個々の家庭の両親の養育態度によって、男の子も女の子も、社会的規準からみて、共に男性的であったり、共に女性的であったり、男の子が女性的で、女の子が男性的な家庭というものは多分にあるのではないかと思われる。それにもかかわらず、我々の文化の中では、個人の生長が単に家庭の中に留まらずに、社会との大きな関連の中で行われるから、家庭の中で、女性的な男の子や、男性的な女の子も、生長するにつれて、男性化し、女性化するものである。同様に、Meadのあげた例は、全て、未開社会であり、これらの社会が、文明化されるにつれて、先進国からの男女の規準が導入され、やがては、我々の社会と同様な男性性格、女性性格の形態をとりうるのではなからうかという推測もなされる。

性の分化について、江上(東京大学公開講座、1974)の言述をもとに、進化的に見れば、もともと両性的である下等な生物から、高等な生物に進化するにつれて、性は分化して、同一種

*昭和49年9月17日受理

内の個体の多様性をとりうる為の役割を果たす様になった。即ち、多様な個体を産み出す為には、形態の異った2つの個体（雄と雌）が結合し、遺伝子の交叉がおこることが、種の種族保持の為に望ましいことである。そして、個体の多様化が生じるほど、環境の変化に対して、生き残りうる個体も生じやすく、それだけ、種族保持の可能性が大きくなるものである。こうして、人類に於ては、性は極度に明確に分化しているが、それでも、女性と男性と異なる点は、大きく言って、女性に於ける、「子供を産み育てる為の身体的、生理的条件」という、一つの事柄に集約することさえ可能である。それ以外の、性的性格の殆んどは、社会、文化的要因により、二次的に加わったものに他ならない。

今日まで、差異心理学を主に、青年心理学、女性心理学等の心理学の多くの文献をはじめ、小説、ノンフィクション、歴史、哲学等の書物に於て、男性性格、女性性格は記述されてきているが、それらの男性性格、女性性的は、殆んど共通の特性群からなっている。例えば、男性性格としては、責任感がつよい、積極的である、攻撃的である、勇気がある、独創性がある、決断力がある等々であり、女性性格としては、嫉妬深い、依存心がつよい、感情が細やかである、温和である、従順である、被暗示性がつよい等々である。そして、これらを、stereotype な男性性格、女性性格と呼ぶことが出来る。

男性性格、女性性格は、従来、正反対のもの、対立するものとして、一次的にとらえられてきているが、実際に個々の個人に於て、男性的であることは、女性的でないことなのか、又、女性的であるのは、男性的でないことなのかという疑問が生じてくる。つまり、男性性格と女性性格は、同一個人に於て、相容れない矛盾したものであるのかどうかである。或は、又、ある特性は、男性的な特性とか女性的な特性という風に決定づけられてしまっているのだろうか。特に、○×式の質問票に於ては、男性的な特性の項目に○をつけることと、女性的な特性

の項目に×をつけることが、同じ1点として評価されるわけであるが、この2つのこと（又は、その逆に、男性的な特性の項目に×をつけることと、女性的な特性の項目に○をつけること）を同じものだと評価してよいかどうか疑問に思われる。

それ故、この研究では、男性的と認められる特性が女性的特性でないのかどうか、又、一方、女性的と認められる特性が男性的特性でないのかどうかということを調べてみる。その際、方法としては、評定法を用いて、従来のように、男性的—女性的という一次元の尺度でなく、男性性の尺度と女性性の尺度を別々に評定して、多くの特性に対して、男女性の二次元的な把握が可能かどうかを調べてみることにする。

目 的

(1) 男性性格、女性性格が相対立するものかどうかを調べる為に、多くの特性について、男性尺度、女性尺度の2つの尺度を用いて、評定者に評定してもらう。その結果、男性的でも女性的でもある特性、男性的であり女性的でない特性、女性的であり男性的でない特性、男性的でも女性的でもない特性の4つの特性群が得られるかどうかをみる。即ち、男性性格、女性性格を従来のように一次的でなく、二次元的に把握することが可能かどうかを調べる。

(2) この評定の結果から、現在の日本の社会での、stereotype な男性性格、女性性格を知ることが出来る。勿論、これは、評定者の集団をもとにしたものであるが。

(3) 評定される項目に、気質特性を加えることにより、Kretschmer の3気質類型と男女性との関係を知ることが出来る。尤も、これは、男女性を気質や体型に関連させてみようとした、筆者の後続の研究の為であって、直接に、Kretschmer の3気質類型と男女性に関連しているわけではない。

(4) 評定者を男性グループと女性グループに分けて結果を比較すると、評定者の男女の違いに

よる評定自体の差異を見出すことが出来る。

(5) 評定の結果を因子分析することにより、男性性格、女性性格の構造を、さらに検討出来る。

方 法

(1) 評定用紙の作成

男女性の特性を記述した文献（主として差異心理学の領域）から、男性性格、女性性格と認められている特性を全て抜萃する。その文献名は、参考文献の、1, 2, 3, 10, 12, 13, 16, 18, 20, 27, 28 である。以上の文献から、概当する部分に於て、男性性格、女性性格の特性を全て抜萃し、同じ様な特性、重複する特性が多いので、それを一覧表にしたのが、表1である。

表1 文献から得られた stereotype な男性性格・女性性格

男性性格	女性性格
行動の積極性	行動の消極性
行動的・実行力	静的・行動がゆるやか 行動の範囲が狭い
明朗・活発	
自主性・自発性	運命的、あきらめ
外向性、開放性	内向性、閉鎖性 空想性、排他的
戸外の仕事	家庭、室内
昂揚的	自己制御、謙抑的
表現が卒直	要求がひかえ目 目立たぬ様にする
支配性、指示、命令	服従、依存的 抑圧的
権力欲、名誉欲	
営利心	
組織的、計画的	自己中心的、個人本位 自己愛
優越感、いはる	劣等感、自己卑下
自己主張	
自己満足、自信	自己憐憫、嫉妬
自己充足感	不十分の感情
能動性、選択性	受動性、待期性
闘争的、争い、けんか	温和、おとなしい
競争的	
弱い者いじめ	やさしさ
攻撃的、征服	残忍で同情心が強い
反抗	忍従的、奉仕、従順
なまけ、不真面目	規律に従う、素直
粗暴 残忍	道徳的に清潔
いたずら	社会的態度 愛嬌、媚、はじらい

男性性格	女性性格
粗野	快活、明朗 細かいことに注意が向く 清潔
勝負ごとが好き	真面目で経済的
短気、性急	落ちつき
冒険を好む	臆病、こわがり
勇氣、大胆	恐怖が多い
機智に豊む	
たくましさ、思いやり	神経質
安定性	不安、感受性が強い 笑い易い
感情に支配されない	情緒の不安定 神経症傾向が大きい
堅忍、強固性	衝動的、緊張が高い
抵抗性	発作的に仕事をする
忍耐力、耐久力	気持がくじけ易い
偏執性	根気がない、移り気 変化への欲求
	柔軟性、可塑性
	優柔不断
決断力、判断力	決心がつきにくい 悲しみが持続
	固執性、狂信性
責任感	責任を他人に転嫁
独立性	独立心が無い
救助をこぼむ	社会的依存性、協力
内省的	内省の欠如、虚栄 誇張する傾向
生産性、仕事	消費性
新しいものを求める	保守性
変化性	
発明、創案、創造性	個性、人格のなさ
機械・科学・物理現象に興味	人間相手・对人的興味
政治・経済・理論価値への指向	芸術・宗教・社会的価値への指向
分析、探究心	美的感情に豊む 宗教心のある
理智的、議論を好む	直観的・思考の浅薄さ 勤の良さ
抽象的	抽象的なことをきらう
理論的	論理性を欠く
	現実的、主観的
	共感性、同情、親切
主知的 鋭角的	主情的、鈍角的
集中的、分化性	分散的、未分化性
対立性	宥和性
自我的	没我的
精神性	暗示にかかりやすい
正義感、信念	生命性
人道主義的、広い心	権威主義的

男性性格	女性性格
自分の行為の規範を自分自身の中にもつ	価値判断を世間の評価におく
自分の思想や内部の世界に生きる	生活や外部の世界に生きる
服装に無関心	衣服、装飾に関心
	表面的
	流行に左右されやすい
	他人の噂に敏感
見かけより実用を選ぶ	実用より見かけを選ぶ
普遍的感情で判断	人間的感情で判断
感情に支配されない	「好き嫌い」の価値判断

この中から、適当によく似た特性どうしをまとめ、48 特性を選んだ。そのうち、42 特性は対をなしている (21 対) が、他の 6 特性は対をなしていない。

次に、Kretschmer の 3 気質類型と男女性との関係を調べる為に、次の文献の中から、3 気質類型 (Scheldon の 3 類型や、3 つの内因性精神病……分裂病、そううつ病、てんかん……の病前性格等も考慮に入れた。) に当てはまる特性を選び出し、それぞれ、14 特性ずつにまとめた。

表-2 各特性の男性尺度、女性尺度の平均及び両尺度の平均の和と相関

特 性	男性尺度平均	女性尺度平均	両尺度平均の和	両尺度の相関	特 性	男性尺度平均	女性尺度平均	両尺度平均の和	両尺度の相関
男性的であり、女性的である特性					男性的でも女性的でもない特性				
M,L 忍耐力がある	3.64	4.49	8.13	-0.072	S,L 陰気でエスプリに欠ける	1.60	2.68	4.28	+0.055
M,C 思いやりがある	3.17	4.03	7.20	+0.026	C 厭世的である	2.17	2.20	4.37	-0.127
C 感情が暖かく共感的である	3.12	3.87	6.99	-0.047	L 愚図で動作がのろい	1.69	2.73	4.42	+0.143
F,C 現実的である	3.20	3.61	6.81	-0.189	N だらしない	2.74	1.88	4.62	+0.053
F,S わがままである	3.26	3.39	6.65	-0.048	S 感情が冷たい	2.42	2.28	4.70	+0.055
F,C 協調性に豊む	3.13	3.18	6.31	-0.115	S 皮肉屋である	2.64	2.32	4.96	-0.100
M 見かけより実用を選ぶ	3.00	3.08	6.08	-0.398	M 残忍である	3.00	1.98	4.98	-0.267**
					S 無口で孤独を好む	2.83	2.70	5.53	-0.247*
					N 要領がいい	2.94	2.61	5.55	-0.103
女性的であり、男性的でない特性					男性的であり、女性的でない特性				
F 服装に関心がつよい	2.09	4.45	6.54	-0.024	M,L 大胆で冒険を好む	4.59	1.66	6.25	-0.327**
F,S 感情が繊細で細かいことに注意がいく	2.15	4.25	6.40	-0.356**	M 決断力がある	4.48	2.07	6.55	+0.123
F,C 温和でやさしい	2.57	4.24	6.81	-0.029	M,C 積極的である	4.38	2.40	6.78	-0.048
F 虚栄心がつよい	2.25	4.10	6.35	-0.088	M,L 支配的である	4.21	1.90	6.11	-0.344**
F,C 同情心がつよい	2.79	3.92	6.71	-0.077	M,C 自信に満ちている	4.18	2.36	6.54	-0.015
F 嫉妬心がつよい	1.92	3.92	5.84	-0.216*	M 救助をこばみ独力でものごとをやろうとする	4.16	1.87	6.03	-0.224*
F 奉仕的である	2.67	3.90	6.57	-0.156	M 表現が卒直である	4.13	2.40	6.53	-0.075
C おしゃべりで社交的である	2.22	3.89	6.11	-0.069	M,L 攻撃的、闘争的である	4.13	1.79	5.92	-0.150
F 室内でする仕事が好きである	2.04	3.83	5.87	-0.033	M,L 正義感がつよい	4.12	2.55	6.67	-0.076
F,L 保守的である	2.39	3.81	6.20	-0.307**	M 創造的である	4.05	2.43	6.48	+0.071
F 服従的である	1.51	3.81	5.32	-0.215	M 自分の行為の規範を自分自身の中にもつ	4.04	2.19	6.23	-0.092
M,L ものごとにこだわる	1.69	3.79	5.48	-0.109	M 議論を好む	3.85	2.12	5.97	-0.299**
F 直観的にもものごとを考える	2.54	3.71	6.25	-0.365**	M 革新的である	3.84	2.06	5.90	-0.285
F,S 臆病である	1.45	3.71	5.16	-0.145	M 野外にいることが好きである	3.80	2.23	6.03	-0.147
L 礼儀正しい	2.87	3.70	6.57	+0.083	M,S 理想主義的である	3.72	2.85	6.57	-0.200**
L 几帳面である	2.50	3.65	6.15	-0.014	C 朗らかでユーモアに豊む	3.67	2.84	6.51	-0.025
F 価値判断を世間の評価におく	2.34	3.65	5.99	-0.471**	M,L 粗野である	3.50	1.52	5.02	-0.138
L 儉約である	2.00	3.65	5.65	-0.000	M 情緒が安定している	3.47	2.70	6.17	+0.201*
F,S 消極的である	1.61	3.65	5.26	-0.339**	S 気真面目でガンコである	3.42	2.41	5.83	-0.263**
F 気持がくじけ易い	1.66	3.63	5.29	-0.050	M 反抗的である	3.38	2.16	5.54	-0.257**
F,L 規律に従う	2.96	3.58	6.54	-0.178	F,C 融通がきく	3.26	2.50	5.76	-0.152
F,C,S 気が変わり易く優柔不断である	1.54	3.56	5.10	-0.046	M 内省的である	3.03	2.81	5.84	-0.218*
F 衝動的で不安が多い	2.18	3.33	5.51	-0.179	C 官能的、享樂的である	3.02	2.78	5.80	-0.200*
F,S 空想を好む	2.83	3.31	6.14	-0.307**					
F,S 劣等感がつよい	2.04	3.07	5.11	+0.052					

* P<0.05 有意 M: 男性的特性として選んだもの
 ** P<0.01 有意 F: 女性的 " "

S: 分裂気質特性 L: 粘着気質、闘士型気質特性
 C: そううつ気質特性 N: Neutral な特性

その文献名は、参考文献の、4、6、7、12、14、19である。そして、この14特性ずつの42特性は、前述の男女性の特性、48特性となるべく重複させて、(評定の為の項目を少なくする為に)計64特性を選んだ。この64特性は、表2に示してある。

この64特性について、各特性の男性度、女性度を知る為に、それぞれ、非常に男性的である——全く男性的でない、の5段階評定尺度、非常に女性的である——全く女性的でない、の5段階評定尺度を用意して、評定者に評定してもらった。評定尺度は図1のように設定した。

図1 評定尺度

○男性性の尺度

次に多くの性格や、行動の特性を表わす文章が並んでいます。まず、最初に一般の多くの公約数的な男性を思い浮べて下さい。そして一つ一つの特性について評定尺度の適当な欄に×印をまず目一杯に明確に記入して行って下さい。

特 性	非常に女性的である	かなり女性的である	やや女性的である	あまり女性的でない	全く女性的でない
1 積極的である					
2 議論を好む					
3 無口で孤独を好む					

○女性性の尺度

今度は、一般の多くの公約数的な女性を思い浮べて下さい。そして、前と同じ様に、一つ一つの特性について評定して行って下さい。

特 性	非常に男性的である	かなり男性的である	やや男性的である	あまり男性的でない	全く男性的でない
1 積極的である					
2 議論を好む					
3 無口で孤独を好む					

ここで、評定尺度を、数値でなく、非常に、かなり、やや、という様な形容詞で作成したのは、評定者が評定するに当り、この方が評定し易いのではないかと考慮した結果である。又、インストラクションに於て、一般の多くの公約数的な男性(女性)としたのは、stereotypic な意味に於て、とらえてほしいからであり、一般の多くの公約数的という言葉の説明すれば、それは、一人でなく多人数であること、特定の人々を指さないこと、abnormal な人々を考えないこと、特定の文化的地域のグループを指さないこと等の意味で用いたわけである。

(2) 評 定 者

多少とも、男性性格、女性性格に関する知識をもった人々、人間を一面的でなく、多面的に観る能力のある人々、が良いと考えて、日本心

理学会会員を評定者とした。1968年度版、日本心理学会会員名簿から、第Ⅲ部門、大学卒業年度、1960年以後の者(年齢、約26~42才)について、職業別比率で、男女、各100名ずつ、計200名を評定者として選んだ。その200名に対し封書による郵送法を用い、1970年4月25日から、同年6月30日の間に返却されたものを資料として用いた。封書の回収率は、男性57人(57%)で、その内1人は、1頁記入なし。女性51人(51%)で、その内1人は代理人にて不適当だったので、実際に評定者として適当なのは、男性56人(56%)、女性50人(50%)であった。評定者106人の職業は、表3に示してある。又、評定者の平均年齢は、男性、36.6才、女性、31.8才であり、全体では、34.3才であった。女性の年齢が低いのは、心理学会の構成員全体に

表-3 評定者の職業

職業	年齢		42~37		36~32		31~26		計		計	
	性別	性別	男	女	男	女	男	女	男	女		
学生及び無職				1		4	3	6*	3	11*	14	
大学	助教授	講師		1		1		2		3	24	
			1	3		2	1	3	2	3		
その他大学関係・研究所	教授	教授	2	2					4			
医学・精神衛生関係病院				1	1	1		2	1	4	16	
			2	1		3	2	3	4	7		
児相・心相	相・更相	相等		3		1	2	1		5	2	13
					2		1		1		3	
養護・社会福祉				1	1	1		2	3	4	4	8
矯正・鑑別所・少年院	刑務所	裁判		8		4	1	1	2	13	3	22
			1	1				1	1	2	1	
警察				1		1			1	1		
会社	幼・小・中・高校	その他の公務員			1	1			1	1	2	3
			1	1				1	2	1	3	
"公務員"のみ記入	無記入			2		1			2		2	2
						1			1		1	
計			5	27	6	14	20	10	24	56	50	106

*一人は元会員

於て、女性の年齢が低い層に偏っているからである。

結果と考察

(1) 4つの特性群

"男女性の評定、に於て、106名の評定者の資料に対し、"非常に男性的(女性的)である"……5, "かなり男性的(女性的)である"……4, "やや男性的(女性的)である"……3, "あまり男性的(女性的)でない"……2, "全く男性的(女性的)でない"……1, の数値を与え、評定尺度の理論的平均値として、3.00の値を定めた。そして、各特性の男性尺度、女性尺度それぞれの平均値(男性点、女性点)、男性尺度と女性尺度の平均値の和、及び、男性尺度、女性尺度、両尺度の相関を求めた。その結果を、平均値(男性点、女性点)が共に、3.00より大きい特性、即ち、男性的であり女性的である特性、男性点が3.00より大きく、女性点が3.00より

小さい特性、即ち、男性的であり女性的でない特性、以下同様に、女性的であり男性的でない特性、男性的でも女性的でもない特性の、4つのグループに分けて示したのが、表2である。

この結果より、男性的であり女性的である特性が7ヶ(11%)、男性的であり女性的でない特性が23ヶ(36%)、男性的でなく女性的である特性が25ヶ(39%)、男性的でも女性的でもない特性が9ヶ(14%)見出された。これらを、均等分布の理論比に対し、 χ^2 -検定した結果は、0.1%以下で有意に否定された。それ故、男性的であり女性的である特性や、男性的でも女性的でもない特性は、統計的に有意に少なかったと言うことが出来、男女性の二次元的把握の困難さを窺わせる。

もっと詳しく見ていくと、男性的であり女性的である特性は7つあり、そのうちの3つは、男性的特性として選んだ特性であり、他の3つは、女性的特性として選んだ特性、残りの1つ

は、そううつ気質特性であった。この男性的であり女性的である7つの特性は、“感情が暖かく共感的である”、“協調性に富む”、“思いやりがある”等、良好な人間関係を可能にする様な要素、又は、成熟さを示す様な要素、それに加えて、“見かけより実用を選ぶ”、“現実的である”、“忍耐力がある”等、現実適応的な要素、又、“わがままである”、“忍耐力がある”、“現実的である”等、自我の強さを示す様な要素から成り立っている。

逆に、男性的でも女性的でもない特性は9つあり、そのうち、1つは、男性的特性として選んだ特性で、6つは、気質特性であり、そのうちの4つまでが、分裂気質特性である。あとの2つは、中性的(neutral)な特性である。この9つの特性は、“残忍である”、“皮肉屋である”、“だらしない”、“陰気でエスプリに欠ける”、“感情が冷たい”といった、良好な人間関係を阻害する様な、反社会的、非社会的な要素や、“無口で孤独を好む”、“厭世的である”等の逃避的、自閉的な要素から成り立っていて、いずれも、社会的に評価の好ましくない特性が占めている。

(2) 評定の結果から得られた stereotype な男性性格、女性性格

男性性格、女性性格として選んだ、各24ずつの特性のうち、19が男性的であり女性的でない特性となっていて、20が女性的であり男性的でない特性となっていて、stereotype な男性性格、女性性格は、かなり定着して動かし難いものと思われる。例外的な特性は、“ものごとにこだわる”という男性的特性で、この評定では、女性的であり男性的でない特性となり、又、“融通がきく”という女性的特性は、この評定では、男性的であり女性的でない特性となっている。この2つの特性は、もともと、対をなす特性であるので、文献上のものと、実際の評定とで、逆に入れかわっていることとなる。

次に、stereotype な男性性格、女性性格を、評定の結果からみてみると、男性性格としては、

大胆で冒険を好む、決断力がある、積極的である、粗野である、自信に満ちている、自分の行為の規範を自分自身の中にもつ、革新的である、議論を好む、表現が卒直である、創造的である、野外にすることが好きである、正義感がつよい、反抗的である、気真面でガンコである等である。

女性性格としては、服装に関心がつよい、服従的である、臆病である、ものごとにこだわる、感情が繊細で細いことに注意が向く、消極的である、嫉妬心がつよい、気が変わり易く優柔不断である、気持がくじけ易い、虚栄心がつよい、室内でする仕事が好きである、儉約である、おしゃべりで社交的である、保守的である、温和でやさしい、価値判断を世間の評価におく、奉仕的である、同情心がつよい、衝動的で不安が多い、直観的にものごとを考える、几帳面である、劣等感がつよい、等である。

文献上で stereotype な男性性格、女性性格でなく、この評定で、stereotype な男性性格、女性性格に入れられたものは、男性性格では、“気真面目でガンコである”、女性性格では、“儉約である”、“ものごとにこだわる”、“几帳面である”、“おしゃべりで社交的である”等である。

この評定から得られた、stereotype な男性性格は結局、男性の活動性、優位性、独立性、自我拡大性、統合性、等を示し、女性性格は、女性の軟弱さ、静穏さ、暖かさ、劣等性、不安定さ、等を示していると同時に、これらの評定そのものに於て、男性性格の方を女性性格よりも秀れたものとする様な枠組や、男性性格も女性性格も、出来るだけ社会的に好ましい特性を当てはめたいという、社会的評価の枠組がみられる。

(3) 男性尺度と女性尺度の相関

次に、各特性の男性尺度と女性尺度の相関(ピアソンの相関)を、表2でみてみると、相関のプラスの特性が10ヶあることがわかる。これは、この特性に対して、男性的であること、即ち、女性的でないこと、男性的でないこと、即ち、女性的であるというような、一次元的把握

を否定するものである。このうち、4つは、男性的でも女性的でもない特性であり、1つは、男性的でも女性的でもある特性なので、この5つの特性は、男女性の二次元的把握を可能にするような特性であるとも言えるし、又、男女性と全く関係のない特性であり、これらの特性をそもそも、男女性の尺度で評定させたこと自体に問題があるとも言える。

又、両尺度の相関で、有意に負の相関の特性は、それほど多くないし、負の相関の絶対値も、一般的にそれほど大きくはないことがわかる。さらに、両尺度の平均値の合計が一定の6.00でないこともわかり、これらの結果は、男性性、女性性を一次元的にでなく二次元的に把握することの可能性を多少なりとも示している。

(4) 男性の評定者と女性の評定者による違い

男性の評定者56人と、女性の評定者50人に

ついて、各特性の男性尺度、女性尺度の平均値を算出し、その各々を、男性の評定者と女性の評定者の間で比較して、t-検定で統計的に有意な差のある特性を示したのが表4である。この表より、統計的に有意な差のある尺度は、21ヶある。

男性の評定者の方が、より男性的だと評定した特性はなく、女性の評定者の方が、より女性的だと評定した特性は、「衝動的で不安が多い」、 「忍耐力がある」、 「協調性に富む」の3つであり、これらの特性は、まさに、女性の現実感覚に根ざした結論でもあるようである。男性の方が、より女性的だと評定した特性は、「服装に関心がつよい」のみであり、男性の方がそういう外面的な特徴をとらえやすいのかもしれない。

男性の評定者の方が、より男性的でないと評定した特性は、「嫉妬心がつよい」、 「皮肉屋であ

表-4 男性の評定者と女性の評定者とで差のあった特性

特 性	男性性の尺度		女性性の尺度	
	男性の評定者	女性の評定者	男性の評定者	女性の評定者
優柔不断である	1.70	1.36 **		
奉仕的である	2.90	2.41 **		
同情心がつよい	2.97	2.60 **		
気持がくじけ易い	1.83	1.48 **		
嫉妬心がつよい	1.79 *	2.09		
皮肉屋である	2.47 *	2.86		
要領がいい	2.79 *	3.13	2.46 *	2.78
感情が冷たい	2.29 *	2.59		
服装に関心がつよい			4.60 *	4.28
衝動的で不安が多い			3.15	3.55 *
忍耐力がある			3.16	3.86 ***
協調性に富む			3.00	3.38 *
議論を好む			2.25	1.98 *
創造的である			2.24 **	2.66
気真面目でガンコである			2.13 **	2.72
情緒が安定している			2.54 *	2.90
自信に満ちている			2.20 *	2.56
粗野である			1.41 *	1.64
融通がきく			2.29 **	2.74
決断力がある			1.93 *	2.23

(注) 男性の評定者と女性の評定者による平均値の差をt-検定した結果 *... P<0.05

** ... P<0.01, *** ... P<0.001で有意差あり

る、"要領がいい、"感情が冷たい、等であり、女性の方が、より男性的でないとして評定した特性は、"優柔不断である、"奉仕的である、"同情心がつよい、"気持がくじけ易い、等であり、女性の方が、より男性的でないとしているのは、むしろ、女性のもつ女性らしい特徴であるのに対し、男性の方が、男性的でないとしているのは、社会的、道徳的な面に於ける"いやらしさ、"といったものをさしているようである。

又、男性の評定者の方が、より女性的でないとして評定した特性は、"創造的である、"気真面目でガンコである、"情緒が安定している、"要領がいい、"自信に満ちている、"粗野である、"融通がきく、"決断力がある、等であり、女性の方が、より女性的でないとして評定した特性は、"議論を好む"のみであった。男性の評定者が、女性的でないとして評定している特性は、どちらかと言えば、現実の女性の中にみられる、男性からみて、いやな面であり、女性がこうあってほしくない、もっと男性に依存した、頼りない、なよなよした女性であってほしいという様な欲求を表わしているようでもある。

次に、男性の評定者と女性の評定者の結果を比較して、男性尺度で、より男性的と評定し、女性尺度で、より女性的でないとして評定するか、又は、女性尺度で、より女性的と評定し、男性尺度で、より男性的でないとして評定したような特性、即ち、より stereotype な男性性格、女性性格と見なしている特性をみていくと、男性の方が、より stereotype な男性性格とみている特性は、"理想主義的である、"朗らかでユーモアに富む、"気真面目でガンコである、"野外にすることが好きである、"自分の行為の規範を自分自身の中にもつ、"革新的である、"自信に満ちている、"正義感がつよい、等であり、女性の方が、より stereotype な男性性格とみなしている特性は、"議論を好む"と"残忍である"と"反抗的である"である。又、男性の方が、より stereotype な女性性格とみなしている特性は、"室内でいることが好き、"嫉妬心が

つよい、"価値判断を世間の評価におく、"保守的である、"儉約である、"服装に関心がつよい、"虚栄心がつよい、等であり、女性の方が、より stereotype な女性性格とみなしている特性は、"衝動的で不安が多い、"感情が繊細で細かいことに注意が向く、"奉仕的である、"空想を好む、"同情心がつよい、"規律に従う、"礼儀正しい、"直観的にものごとを考える、"気持がくじけやすい、等であり、男性の方は、男性性格、女性性格を、行動的、外面的にとらえているのに対して、女性の方は、男性性格、女性性格を、情緒的、内面的にとらえているという違いがみられる。

(5) 気質特性と男女性

Kretschmer の分裂気質特性、そううつ気質特性、粘着気質特性の各々、14 特性ずつをとり出して、男性性、女性性との関係をみた。均等分布の理論比に対して、 χ^2 一検定した結果は、統計的に有意な分布の片寄りは何らなかった。しかし、傾向としては、分裂気質特性は、男性的でない方向に、そううつ気質特性は、男性的であり、女性的である方向に比較的多くみられた。又、粘着気質特性は、分布は一様であるが、そのうち、Scheldon の身体はりぎり型の特性、"大胆で冒険を好む、"支配的である、"攻撃的、闘争的である"の3つは、極端に男性的であり、女性的でない方向にあり、Kretschmer の粘着気質特性が、どちらかと言えば、男性的でなく女性的である方向にあるのと対称的であり、これら両者を一緒に考えるわけにはいかないことがわかる。

(6) 因子分析

64 の特性について、106 人の評定者の、男性尺度の評定点、女性尺度の評定点をもとに、各尺度別に、各特性間のピアソンの相関を求め、相関マトリックスを作成し、主因子法、ヴァリマックス回転により、因子分析を行った。

その結果、男性性の尺度、女性性の尺度、ともに第Ⅷ因子まで抽出されたが、そのうち、全分散に対する比率 ($\Sigma a^2 / N$) が、5%を上廻る

もののみをあげると、男性性の尺度では、第I因子と、等III因子(第II因子は、 $\Sigma a^2/N=3.4\%$)、女性性の尺度では、第I因子、第II因子、第III因子、第IV因子があげられる。各因子について、因子負荷量の絶対値が0.3以上の項目のみを、負荷量の大きい順番(負の負荷量のは小さい順番)に表わしたのが、表5である。

表5 男性性の因子、女性性の因子

○男性性の因子

〈第I因子〉活動性、自我拡大性の因子

$\Sigma a^2/\Sigma h^2=29.7\%$, $\Sigma a^2/N=11.1\%$

決断力がある	0.694
自信に満ちている	0.504
表現が卒直である	0.500
大胆で冒険を好む	0.470
救助をばみ、独力でものごとをやろうとする	0.437
積極的である	0.409
攻撃的、闘争的である	0.360
正義感がつよい	0.339
自分の行為の規範を、自分自身の中にもつ	0.336
革新的である	0.311
朗らかでユーモアに富む	0.305
気が変わり易く優柔不断	-0.805
陰気でエスプリに欠ける	-0.770
ものごとにこだわる	-0.767
気持がくじけ易い	-0.757
服従的である	-0.715
消極的である	-0.665
臆病である	-0.560
愚図で動作がのろい	-0.424
厭世的である	-0.325

〈第III因子〉女性性(母性)の欠如の因子

$\Sigma a^2/\Sigma h^2=21.1\%$, $\Sigma a^2/N=7.9\%$

感情が暖かく共感的である	-0.880
思いやりがある	-0.861
温和でやさしい	-0.691
同情心がつよい	-0.563
朗らかでユーモアに富む	-0.521
協調性に富む	-0.498
服装に関心がつよい	-0.421
几張面である	-0.416
情緒が安定している	-0.408
おしゃべりで社交的である	-0.397
礼儀正しい	-0.387
皮肉屋である	-0.375
奉仕的である	-0.374
規律に従う	-0.369
感情が繊細で細いことに注意が向く	-0.338
保守的である	-0.311

○女性性の因子

〈第I因子〉活動性、社会的外向の因子

$\Sigma a^2/\Sigma h^2=12.4\%$, $\Sigma a^2/N=5.8\%$

積極的である	0.972
議論を好む	0.579
朗らかでユーモアに富む	0.571
大胆で冒険を好む	0.454
野外にすることが好きである	0.433
救助をこばみ、独力でものごとをやろうとする	0.352
表現が卒直である	0.325
正義感がつよい	0.318
決断力がある	0.310
礼儀正しい	-0.315

〈第II因子〉自我の弱さ、ヒステリー性格の因子

$\Sigma a^2/\Sigma h^2=26.4\%$, $\Sigma a^2/N=12.4\%$

気が変わり易く優柔不断	0.823
気持がくじけ易い	0.765
ものごとにこだわる	0.748
虚栄心がつよい	0.700
服従的である	0.698
嫉妬心がつよい	0.679
陰気でエスプリに欠ける	0.646
室内でする仕事が好きである	0.635
消極的である	0.624
劣等感がつよい	0.561
臆病である	0.559
衝動的で不安が多い	0.512
服装に関心がつよい	0.477
保守的である	0.449
価値判断を世間の評価におく	0.434
儉約である	0.429
おしゃべりで社交的である	0.412
愚図で動作がのろい	0.411
礼義正しい	0.351
わがままである	0.316
自分の行為の規範を、自分自身の中にもつ	-0.381

〈第III因子〉母性の因子、情緒の豊かさの因子

$\Sigma a^2/\Sigma h^2=25.9\%$, $\Sigma a^2/N=12.2\%$

思いやりがある	0.896
感情が暖かく共感的である	0.807
温和でやさしい	0.782
同情心がつよい	0.777
協調性に富む	0.682
奉仕的である	0.590
内省的である	0.570
情緒が安定している	0.509
礼儀正しい	0.508
創造的である	0.507
几張面である	0.404
感情が繊細で細いことに注意が向く	0.370

融通がきく	0.357
臆病である	0.352
表現が卒直である	0.340
朗らかでユーモアに富む	0.330
規律に従う	0.330
消極的である	0.307
感情が冷たい	-0.694
残忍である	-0.509
粗野である	-0.404
だらしない	-0.399
反抗的である	-0.333
愚図で動作がのろい	-0.301

〈第Ⅳ因子〉男性性の欠如の因子

$\Sigma a^2/\Sigma h^2=16.0\%$, $\Sigma a^2/N=7.5\%$

攻撃的・闘争的である	-0.851
支配的である	-0.816
自信に満ちている	-0.536
決断力がある	-0.524
革新的である	-0.474
融通がきく	-0.449
情緒が安定している	-0.378
・気真面目でガンコである	-0.371
大胆で冒険を好む	-0.351

男性性の第Ⅰ因子は、活動性 (activity) の因子、又は、自我拡大性の因子とみなされ、従来の stereotype な男性性格に近いものである。

男性性の第Ⅲ因子は、女性性の欠如の因子とみなされ、情緒性や、母性の欠如した特性群とみなされる。

女性性の第Ⅰ因子は、男性性の第Ⅰ因子の、正の負荷量をもったものに近い。活動性の因子、

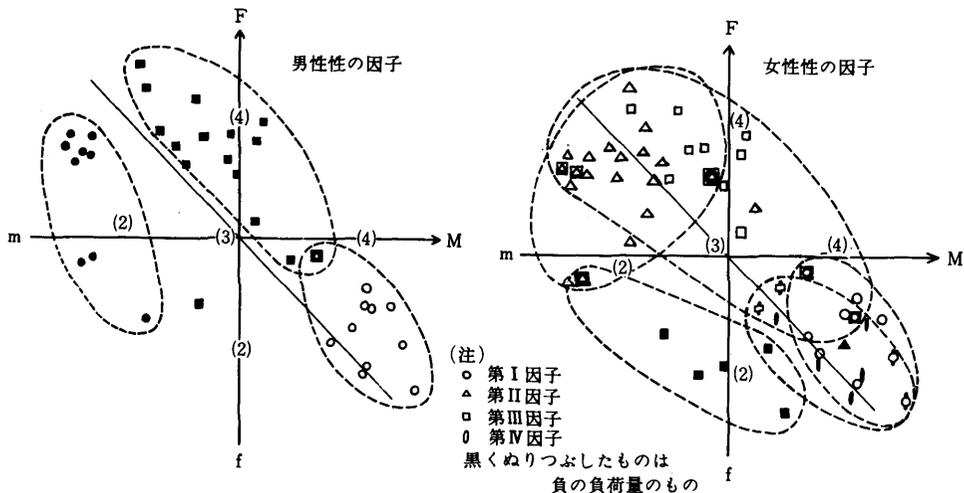
或は、社会的外向の因子と名づけてよいと思われる。

女性性の第Ⅱ因子は、女性の弱さを表わした特性が含まれていて、自我の弱さの因子、或は、社会的内向の因子と名づけてよいと思われ、非活動性や、ヒステリー性格が顕著である。それ故、ヒステリー性格の因子と名づけてもよいと思う。従来の stereotype な女性性格のうちの、「男性に従属した性」としての女性の弱さを表わした因子である。

女性性の第Ⅲ因子は、母性の因子と名づけてよいと思われる。情緒の豊かさの因子ともいえ、望ましい母親像にみられるような特性群である。第Ⅲ因子は、従来の stereotype な女性性のうちの、「子供を産み育てる性」(母性)としての、女性の社会的に好ましい側面の因子であり、第Ⅲ因子と第Ⅱ因子は、女性性のポジティブな面とネガティブな面の2つを、それぞれ表わしていると言える。

女性性の第Ⅳ因子は、第Ⅰ因子と似ているが、少し異っていて、男性性の欠如の因子とみなされる。

女性性の第Ⅳ因子と第Ⅱ因子は、一緒にして考えることが出来、この2つの因子が、女性の弱さを表わしたものとして、男性性の第Ⅰ因子の対極となっているようである。そして、女性



性性として、第Ⅲ因子に示される、女性性の欠如としての男性性におけるが、第Ⅲ因子と、第Ⅰ因子の負の負荷量のものと一緒にして考えられるので、男性性の構造は一次元的であるといえる。

これに対し、女性性の方は、弱さとしての、女性性の第Ⅱ因子と、男性性の欠如としての、第Ⅳ因子とを組にした一つの方向（次元）と、第Ⅲ因子に示される、母性としての女性性の方向（次元）が考えられ、これら2つの方向は、凡そ、直交しているので、女性性の構造は二次元的であるといえる。

(7) 男女性の評定に関する批判

表6に示してある様に、男女性の評定に関して、評定者からの批判はかなり多い、主な批判は、①特性の選び方、②インストラクション、③尺度の設定及び、方法自体への疑問である。特性の選び方については、確かに、不備な点が多く、気質特性を無理に、男女性の観点で評定したり、二義的な意味にとれる特性や、二つの特性を一つにまとめた様な項目があること等、批判すべき点は多々ある。又、特性をもっと広く、行動様式全てにわたる様に選んだ方が興味深かったかもしれないし、逆に、余計な特性を無理に含めていて、強制的に評定した結果、男女性の次元を歪曲したりしているかもしれない。注釈や、批判の多い特性の中には、男性的でも女性的でもない特性が多く含まれているので、結局、男性的でも女性的でもない特性群は、評定者にとって非常に評定し難く、特性として評定に用いるのに問題の多い特性であり、男性的でも女性的でもないということは、男女性に関係ないということであるかもしれない。とにかく、これらの特性を男女性と関係させることに無理があるといえよう。インストラクションと尺度の設定に関しては、この研究が、一つの新しい試みを指向しているので、筆者の意図が充分伝わり難かったと思えるが、しかし、又、筆者の意図をあまり詳しく説明すると、評定が意図的に歪曲される可能性が出てくるので、どう

しようもなかったといえる。たゞ、後から考えると、やはり、男女性に関係ないという評定欄を、別に設定していた方が良かった様に思える。又、評定尺度の中央として、やや男性的、やや女性的という言葉を用いたことも、反省すべき点である。

評定者に関しても、評定者を心理学会会員という、一部専門家に限定したことは、片寄った面があるかもしれない。様々の研究者の間で、性的性格についての意見がくい違っていると思われるし、その辺のくい違いが評定の上にかなり表われているのではないかと思われる。今後、尺度の設定のし方や、評定者を変えて、同様に評定して比較すれば、さらに、何らかの新しい結果が得られる可能性はあると思える。

(8) 全体の考察・結論

評定全般に関して、男性性格、女性性格を、一次元的でなく、二次元的に把握することはかなり無理がある。というのは、男性的であり女性的である特性や、男性的でも女性的でもない特性の数は、非常に少ないし、又、これらに属する特性は、どちらかといえば、男女性に関係がない特性であり、評定し難い特性であったことである。しかし、一方、その二次元的把握を全く否定出来ない事実が多々あることは考慮すべきである。例えば、男性的であり女性的である特性や、男性的でも女性的でもない特性が、いくらかあったこと、又、男性的であり女性的でない特性や、女性的であり男性的でない特性についても、全て、男性尺度の平均値と、女性尺度の平均値の和が一定でなかったこと、男性尺度と女性尺度の相関が、有意に負の特性は、それほど多くなかったこと等である。

参 考 文 献

- 1 Anastasi, A. & Foley, J. P. : Differential Psychology, The Macmillan Company, New York, p612-688, 1949
- 2 (堀秀彦: 恋愛……そのロマンと真実) カルチャーシリーズ 3, 男性と女性……性的差異について, 林書店, P 150—165, 1966
- 3 児童心理, 特集……男の子, 女の子, 金子書房, 第22巻, 第12号, 1968
- 4 笠松章: 臨床精神医学, 中外医学社, P 34, 261—316, 395—457, 1959
- 5 小林さえ編: 男性心理学, 朝倉書店, 1973
- 6 Kretschmer, E. : Körperbau und Charakter, 1959. 相場均訳: 体格と性格, 文光堂, 1960
- 7 Kretschmer, E. : Medizinische Psychologie, 1950. 西丸四方, 高橋義夫訳: 医学的心理学II, みすず書房, P 35—50, 1966
- 8 Lunneborg, P. W. : Stereotypic Aspect in Masculinity-Femininity Measurement, J. of Consulting & Clinical Psychol., Vol. 34, No. 1, P113—118, 1970
- 9 (間宮武: 性と性格) 戸川行男, 長島貞夫編: 性格心理学講座2, 性格の形成, 金子書房, P 27—52, 1960
- 10 松村康平, 小口忠彦編: 女性心理学, 上, 下, 福村出版, 1969
- 11 Mead, M. : Male and Female, 1949. 加藤秀俊, 田中寿美子訳: 男性と女性, 上, 下, 東京創元新社, 1966
- 12 宮城音弥: 性格, 岩波新書, 岩波書店, P 9—69, 145—158, 1960
- 13 三好稔: 差異心理学, 金子書房, P 235—290, 1951
- 14 村上仁, 満田久敏監修: 精神医学, 医学書院, P 567—657, 1967
- 15 Nichols, R. C. : Subtle, Obvious and Stereotype Measures of Masculinity-Femininity, Educational & Psychological Measurement, Vol. 22, No. 3, P449—461, 1962
- 16 日本MMP I研究会編: 日本版MMP I ハンドブック, 三京房, P 42—43, 51—53, 1969
- 17 日本心理学会: 日本心理学会会員名簿, 1968
- 18 Rohracher, H. : Kleine Charakterkunde, 1956. 宮本忠雄訳: 性格学入門, みすず書房, P 262—269, 1966
- 19 佐藤幸治: 人格心理学, 東京創元新社, P 239, 1968
- 20 (詫摩武俊: 現代の男女) 新心理学講座1, 愛と性の心理学, 河出書房, 第5章, P 102—128, 1955
- 21 多田建治: 臨床的パーソナリティーの研究……男女性の観点からみたパーソナリティーの把握, 京都大学教育学部修士論文, 1971
- 22 多田建治: 男性性格, 女性性格の二次元的把握に関する試論, 日本心理学会第37会大会発表論文集, P 428—429, 1973
- 23 Terman, L. M. & Miles, C. C. : Sex and Personality……Studies in Masculinity and Femininity, Russell & Russell, New York, 1968
- 24 Theo Lang : The Difference between a Man and a Woman, 1971. 泉ひさ訳: 男と女のちがひ……性染色体からの出発, 黎明書房, 1973
- 25 東京大学公開講座: 男と女, 東京大学出版会, 1974
- 26 津留宏編: 性差心理学, 朝倉書店, 1970
- 27 渡辺徹, 村中康松, 野上芳彦: 改訂簡易性度検査の解説, 金子書房, 1965
- 28 Weininger O. : Geschlecht und Charakter, 1903, 村上啓夫訳: 性と性格, 東京春秋社, 1936